



PRESS RELEASE

岡山大学記者クラブ

文部科学記者会

科学記者会

御中

令和 8 年 8 月 6 日

岡 山 大 学

がんは高齢者だけの病気ではない—若い人にも起こる“くちのがん” — AYA 世代に特有の特徴と予後を左右する指標を解明 —

- ・ 思春期/若年成人（AYA 世代^{※1)}：15～39 歳）の口腔癌の症例を多施設共同で収集、調査した結果、AYA 世代の早期の口腔がんは高齢者とは異なる特徴を持つことを解明しました。
- ・ AYA 世代口腔癌では舌に好発し、白板症様に広がる表在型が多いことを明らかにしました。
- ・ 腫瘍の深さ（DOI）がリンパ節転移や患者予後を予測する重要な指標であることを示しました。

岡山大学学術研究院医歯薬学域の小野早和子助教は、大阪大学・大阪歯科大学・香川大学・長崎大学・新潟大学・日本歯科大学・藤田医科大学・松本歯科大学との多施設共同研究により、思春期・若年成人（AYA：15～39 歳）世代に発症する早期口腔扁平上皮癌^{※2)}の臨床病理学的特徴と予後予測因子を解明しました。

口腔扁平上皮癌は主に高齢者に発症する病気ですが、近年、AYA 世代での発症とその増加も報告されています。しかし、AYA 世代では発症頻度が低く、特に早期がんにおける特徴や予後に関する十分な知見はありませんでした。

本研究では、各施設から AYA 世代の症例を集積し、包括的な解析を行いました。その結果、AYA 世代の口腔がんは、舌に発生しやすく、白板症のように粘膜表面を広がる病変が多いことが分かりました。さらに、腫瘍の深さ（DOI^{※3)}）が予後を左右する最も重要な因子であることを明らかにしました。本成果は、2026 年 7 月 31 日（日本時間）に北米頭頸部病理学会公式科学誌「*Head and Neck Pathology*」に掲載されました。本研究により、若年者口腔がんへの理解が深まり、早期診断や適切な術後管理、AYA 世代に特化した診断・治療戦略の確立、さらには予後の改善につながることを期待されます。

◆研究者からのひとこと

口腔がんは高齢者の病気というイメージがありますが、若い世代にも発症することがあります。本研究が、若年患者さんの早期診断や適切な治療方針の決定につながり、将来的には予後の改善に貢献できることを期待しています。



小野助教

PRESS RELEASE

■発表内容

<現状>

口腔がんは主に高齢者に多い疾患ですが、若い世代にも発症することがあります。1980 年代以降、若年者に発症する口腔扁平上皮癌（oral squamous cell carcinoma：OSCC）の増加が報告され、近年も同様の傾向が指摘されています。AYA（Adolescent and Young Adult）世代とは 15～39 歳を指し、学生から社会人への移行、結婚・妊娠・出産、子育てなど、人生の大きな転機を迎える時期です。そのため、この世代のがんは、治療だけでなく就学・就労や生活への影響も大きく、近年、医療支援や研究の重要性が高まっています。しかし、AYA 世代の口腔がんは比較的まれで、その特徴や予後、適切な治療・術後管理については十分に分かっていませんでした。

<研究成果の内容>

本研究では、AYA 世代に発症した早期の口腔扁平上皮癌（OSCC）を多施設共同研究により収集し、その臨床病理学的特徴と予後因子について検討しました。

その結果、AYA 世代の OSCC は高齢者とは異なる特徴を有することが明らかになりました。AYA 世代では、舌に発生する割合が非常に高く、白板症のように粘膜表面を広がる「表在型」を示す症例が多く認められました。また、p53 というがん抑制に関わるタンパク質の異常発現や、腫瘍の先端部で小さな細胞集団がばらばらに浸潤する tumor budding^{※4)} など、特徴的な組織学的所見もみられました。AYA 世代全体の予後は高齢者より良好でしたが、腫瘍の深さ（Depth of Invasion：DOI）が 5 mm を超える症例では、術後リンパ節転移^{※5)} や予後不良との関連が認められました。さらに、AYA 世代の約 30%で術後に遅れてリンパ節転移が生じており、DOI に加え、腫瘍の厚さや tumor budding がリスク評価に役立つ可能性が示されました。

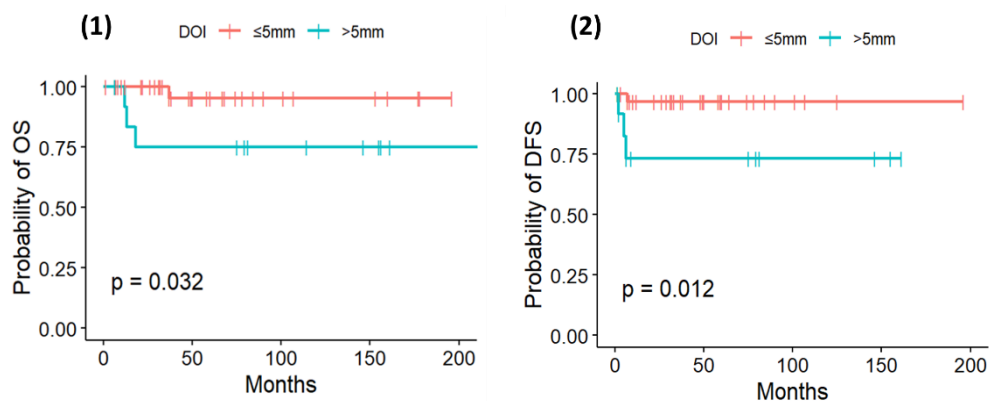


図 1. 腫瘍の深さ（DOI）と予後との関係

腫瘍の深さ（DOI）が 5 mm を超える AYA 世代患者（青）は、5 mm 以下の AYA 世代患者（赤）に比べて、生存率（1）および再発なく経過する割合（2）が低いことが示されました。この結果から、DOI は AYA 世代口腔がんの予後を予測する重要な指標であることが明らかになりました。



PRESS RELEASE

<社会的な意義>

AYA 世代の口腔がんには、舌に発生しやすく、白い病変として現れやすいという特徴があります。治りにくい舌のしこりや白い病変が続く場合には、若い方でも早めに歯科・口腔外科を受診することが重要です。また、本研究で明らかになった DOI や tumor budding などの病理学的評価は、術後のリンパ節転移リスクを見極め、患者さん一人ひとりに適した経過観察や追加治療を検討するうえで役立つ可能性があります。今後、AYA 世代口腔がんの特化した診断・治療・術後管理の確立につながることを期待されます。

■論文情報

論文名 : Early-stage Oral Squamous Cell Carcinoma in Adolescents and Young Adults Compared with Older Patients Exhibits Distinct Clinicopathological Features

掲載誌 : *Head Neck Pathol.* 2026 Jul 31;20(1):88.

著者 : Sawako Ono, Katsutoshi Hirose, Hotaka Kawai, Tatsuya Abe, Shintaro Sukegawa, Masanori Masui, Chihoko Ikeda, Madoka Isomura, Yuri Tachibana, Junya Ono, Katsumitsu Shimada, Hitoshi Nagatsuka, Hidetaka Yamamoto,

DOI : 10.1007/s12105-026-01944-w.

URL : <https://link.springer.com/article/10.1007/s12105-026-01944-w>

■研究資金

本研究は、厚生労働科学研究費（24K19859）の支援を受けて実施しました。

■補足・用語説明

1) AYA (Adolescent and Young Adult : 思春期・若年成人)

15～39 歳の年齢層を指します。進学や就職、結婚・出産などライフステージが大きく変化する時期であり、近年、この世代のがん医療や研究への関心が高まっています。

2) 口腔扁平上皮癌

口の中の粘膜を覆う細胞から発生するがん（悪性腫瘍）で、口腔がんの大部分を占める代表的ながんです。

3) DOI (Depth of Invasion : 腫瘍浸潤深さ)

がんが口の粘膜の表面からどのくらい深く組織の中へ入り込んでいるかを示す指標です。

4) tumor budding

がんの先端部分で、がん細胞が小さな集団となって周囲の組織へばらばらに浸潤している状態を指します。

5) 術後リンパ節転移（遅発性リンパ節転移）

手術時にはリンパ節への転移が認められなかったにもかかわらず、手術後の経過観察中に新たにリンパ節転移が見つかることをいいます。



岡山大学
OKAYAMA UNIVERSITY

PRESS RELEASE

<お問い合わせ>

岡山大学学術研究院医歯薬学域

助教 小野 早和子

(電話番号) 086-235-7150

(FAX) 086-235-7156



岡山大学
OKAYAMA UNIVERSITY



岡山大学は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。

